

地域に根ざした家族酪農 ～自然体で高レベル経営を実現～



久保 隆幸 （くぼ・たかゆき）
久保 美恵子（くぼ・みえこ）
北海道紋別郡湧別町
《認定農業者》

推薦理由

[収益性の高い中規模家族経営のモデル]

今日、家族経営にあって多頭飼養を目指す経営が多い中であって、家族労働で無理のない経産牛約 60 頭程度の中規模経営で、2 世代が十分に生活できる高所得を確保している。

入植してから今日まで、特には昭和 31 年の酪農への転換以来、飼養規模の拡大や施設投資等において、蓄積した自己資金での投資を基本としてきた。従って負債の少ない自己資本比率の高い経営を持続してきている。このことは、酪農科学に基づく実践により地域の酪農家にとって到達可能なことを示し、中規模家族経営のモデルとなっている。

自然条件が決して良好でない中であって、まさに、土づくり、草づくり、牛作りが一体となった証である。この経営を一言で評するならば、無駄のない合理的な経営である。酪農に転換以来、安定経営を築き、地域に存立する酪農を先駆的に示してきた意義は大きく次の点で評価される。

1 地域資源に立脚した酪農

地域土壌の特徴である重粘土の改良には、開拓入植の先代以来苦勞を重ねて改良を行い、今日ではその生産性は高い。この土地から生産される牧草、トウモロコシ主体の飼養に努め、個体乳量 9000kg を超える乳量にあって自給率は 60%水準を維持している。一方牛の改良にも早くから努め牛群審査で道内最高得点牛群を育成し、乳量 2 万 kg スーパーカウも作出している。これは、酪農の本源的な原理である、土、草、牛の循環を見事具現化させているといえる。こうした取り組みは持てる地域資源に働きかけ、その恩恵を享受する、まさに地域に立脚した酪農といえるのである。不斷の努力がなくてはこのことは実現せず、

久保氏の表現を借りれば、脈々と流れる開拓者精神がこのことを実現させているのである。

2 酪農科学に基づくきめ細かな技術の駆使と高収益酪農

土壌改良、自給飼料生産、乳牛飼養と乳牛改良、これらが、こと細かく実践され、一つ一つが理にかないうえ、記録を基に次につなげる努力を怠っていない。その結果、無駄のない合理性をもって高い生産と収益性に結びついている。

久保氏の酪農には無理なところはなく、すべてが融合した合理的な経営であることも大きな特徴である。

3 教育ファームの取り組みと消費者交流や農業理解への寄与

久保氏は、子供の成長過程で生き物に触れる機会が必要で酪農体験させたいとの思いから平成7年より小学生を対象に酪農体験を受け入れている。中央酪農会議の「酪農教育ファーム」の認証を受け、今では250名の小中学生が搾乳、乳製品加工などを体験している。

さらには、宿泊施設も整備し、遠方から訪れる観光客の宿泊場所として提供し、消費者との交流を図るとともに湧別町や地域農業の理解の促進に努めている。

(北海道審査委員会委員長 岡本 全弘)

発表事例の内容

1 地域の概況

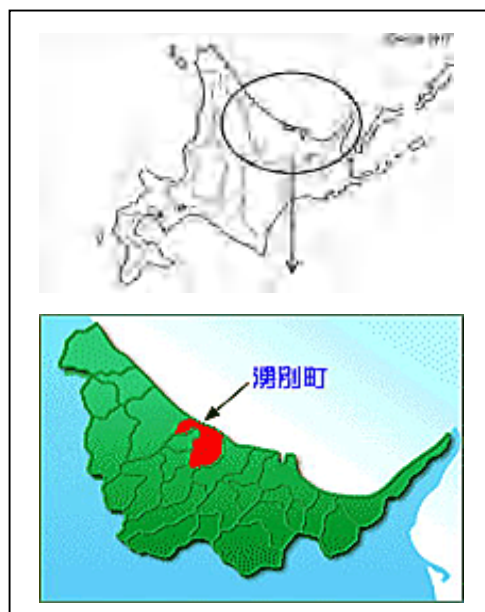
湧別町は、北海道の東北部、網走支庁管内の中央部に位置し、北にオホーツク海を望み東には養殖(ホタテ、カキ)や漁業(鮭、ホッケ、エビなど)の盛んなサロマ湖を擁し風光明媚な農漁村である。

地形は、市街を中心に「八」の字型に西部および南部に広がり、総面積344.35km²を有し、海岸沿いは沖積土と泥炭土質の平坦地であるが、内陸は重粘土質の緩傾斜地である。

気候は、オホーツク海型気候地域のため、農耕期(5～9月)の積算気温は2,257℃(平年)と低いが、降水量および降雪量は少なく年間の日照時間は長い。

しかし、夏季は6月上旬からオホーツク海高気圧が張り出し、その影響で低温と降雨そして海霧が発生し、農作物の生育や一番牧草の収穫に支障をきたしている。

このような自然条件の下、本町は農業と漁業を基幹



産業として発展し、農・漁業を合わせた粗生産額は約 120 億円にも達している。農業は、明治の入植期以降、畑作を中心に営まれ、昭和 30 年代までは「北見ハッカ」の主産地として繁栄してきたが、工業ハッカの台頭により、昭和 39 年に酪農を基幹とした経営に一大転換が行われた。

その後、新しい農業技術の積極的な導入や土地改良等が進められ、現在は経営耕地面積 6080ha (17 年) を有し、酪農経営を中心とした大規模な畜産経営と耐冷作物の小麦、てんさいに野菜のかぼちゃ、スイートコーンを含めた畑作経営が地域に混在し、近年の農業粗生産額は 60 億円台 (畜産 90%、農産 10%) で推移している。

総農家戸数は 239 戸 (17 年) で、1 戸当たり耕地面積は 24.4ha を有し、平成 20 年の酪農家戸数は 132 戸で、乳用牛 1 万 580 頭を飼養し 1 戸当たり 80 頭程度である。

また、高齢化や後継者不足等などから、地域支援システムとして従来からある公共牧場の活用や酪農ヘルパーの充実はもちろん、近年コントラクターおよびフィードサービス (TMR センター) による新たな取り組みも展開されている。

農業をアピールするイベントは、毎年 9 月に漁業・林業と一緒に開催される産業まつりがあり、町民を始め近隣町村から多くの人びとが訪れている

2 経営・生産の内容

1) 労働力の構成 (平成 20 年 12 月現在)

区分	経営主との 続柄	年齢	農業従事日数 (日)		部門または作業担当	備考
				うち畜産部門		
家族	本人	59	345	345	飼養管理・草地管理 牧草収穫・経営管理	
	妻	57	355	355	飼養管理	
	長男	32	355	355	飼養管理・草地管理 牧草収穫・経営管理	
常雇						
臨時雇	延べ人日 10 人 (酪農ヘルパー)					

2) 収入等の状況（平成 20 年 1 月～12 月）

（単位：円）

項 目		金 額	備 考
酪農収入	生乳販売	38,463,860	
	初生牛販売	747,180	
	育成牛販売	5,094,600	
	経産牛販売	1,893,150	
	奨励・補填金等	3,718,501	
	乾草・堆肥		
	共済金	1,195,866	
	その他	1,485,413	
計		52,598,570	
農外収入		3,982	受入利息 3,982、その他 0

3) 土地所有と利用状況

区分		実面積 (ha)		飼料生産利用のべ面積 (ha)	
			うち借地面積		うち借地面積
耕地	水田				
	転作田				
	飼料畑	20.7		20.7	
	未利用地				
	計	20.7		20.7	
草地	個別利用地	30.4	4.2	30.4	4.2
	共同利用地				
	計	30.4	4.2	30.4	4.2
野草地					
山林原野		0.2		0.2	

4) 自給飼料の生産と利用状況（平成 20 年）

使用 区分	飼料の 作付体系	面 積 (a)		所有 区分	総収量 (t)	主な利用形態等 (採草の場合)
		実面積	のべ面積			
採 草	チモシー・シロクロバ ー・アカクロバ	3,040a	5,500a	自己 借地	2,467	1 番草：ラップ サイレージ・乾草 2 番草：ラップ サイレージ・乾草 3 番草：ラップ サイレージ
兼 用						
飼料用 トウモロコシ	デントコーン	2,070a	2,070a	自己	6,800	サイレージ

5) 経営の実績・技術等の概要

(1) 経営実績（平成 20 年 1 月～12 月）

経営の概要	労働力員数 (畜産部門・2000 時間換算)		家族	3.9 人
			雇用	人
	経産牛平均飼養頭数			63.6 頭
	飼料生産用地延べ面積			7,310 a
	年間総産乳量			507,094 kg
	年間総販売乳量			507,094 kg
	年間子牛販売頭数			40 頭
	年間育成牛等販売頭数			10 頭
収益性	酪農部門年間総所得			13,552,595 円
	経産牛 1 頭当たり年間所得			213,091 円
	所 得 率			30.6 %
	経産牛 1 頭当たり	部門収入		696,630 円
		うち牛乳販売収入		604,778 円
		売上原価		647,878 円
		うち購入飼料費		187,834 円
		うち労 働 費		160,722 円
うち減価償却費		157,948 円		
生産性	牛乳生産	経産牛 1 頭当たり年間産乳量		7,973 kg
		平均分娩間隔		13.5 ヲ月
		受胎に要した種付回数		2.3 回
		牛乳 1 kg 当たり平均価格		75.9 円
		乳 脂 率		4.20 %
		無脂乳固形分率		8.57 %
		体 細 胞 数		9 万個/ml
		細 菌 数		万個/ml
	粗飼料	経産牛 1 頭当たり飼料生産延べ面積		80 a
		借入地依存率		8.2 %
	乳飼比 (育成・その他含む)			33 %
	生乳 100kg 当たり差引生産原価			6,974 円
	経産牛 1 頭当たり投下労働時間			124 時間
安全性	経産牛 1 頭当たり借入金残高 (期末時)			68,396 円
	経産牛 1 頭当たり年間借入金償還負担額			15,678 円

(2) 技術等の概要

地帯区分		中山間農業地域
飼養品種		ホルスタイン・ブラウンスイス
後継者の確保状況		有
飼養 ・搾乳	飼養方式	対尻式・タイストール
	搾乳方式	パイプライン
	牛群検定事業	有
飼料	自家配合の実施	無
	TMR の実施	無
	通年サイレージ給与の実施	有
	食品副産物の利用	無
繁殖 ・育成	ET の活用生産の実施	有
	F ₁ 生産の実施	無
	カーフハッチの飼養	無
	採食を伴う放牧の実施	無
	経産牛の自家産割合	100%
販売	加工・販売部門の有無	有 女性チーズグループ、教育ファーム(販売は無)
	地産地消の取り組み	無
その他	肥育部門の実施	無
	協業・共同作業の実施	無
	施設・機器等々の共同利用	無
	共同堆肥センターの利用	無
	ヘルパーの活用	有
	コントラクターの活用	有 コーン収穫
	公共育成牧場の利用	無
生産部門以外の取り組み		有 教育ファーム

6) 主な施設・機械の保有状況

種類	名称
畜舎・施設	搾乳牛舎、育成舎、哺育舎、乾草舎、車庫、倉庫、D型ハウス、バンカーサイロ、尿溜、堆肥舎、堆肥盤、牧柵、パイプラインミルクカー、バルククーラー、バンクリーナー
機械・器具	トラクター、トラック、モアコンディショナー、ラッピングマシン、ロールペーラー、サブソイラー、ジャイロテッター、プランター、スプレーヤー、マニユアスプレッター、ブロードキャスター、プラウ、ツインレーキ、スプリングハロー、タイヤショベル等

7) 家畜排せつ物の処理・利用状況

(1) 処理の内容

処理方式	すべて分離
処理方法	バーンクリーナーで一次分離し、たい肥舎にて切り返しを行いれき汁を完全に分離後、たい肥化し飼料畑、草地に投入する。
敷 料	麦稈

(2) 利用の内容

内容	割合 (%)	用途・利用先等
販 売		
交 換		
無償譲渡		
自家利用	100	

3 経営の歩み

1) 経営・活動の推移

年次	作目構成	飼養頭数	飼料作付面積	経営・活動の内容
昭和24年	畑作専業		5 ha	初代経営主（父）が湧別町より開拓入植
〃 31年	酪畑複合	6 頭	10ha	牛舎（30 坪）建設し酪農部門を開始
〃 43年	酪畑複合	30 頭	10ha	牛舎（55 坪）増築し搾乳牛頭数を 30 頭に拡大
〃 44年	酪畑複合	30 頭	20ha	現経営主（2 代目）が高校卒業し就農
〃 50年	酪畑複合	52 頭	25ha	近隣のでん粉工場の廃材利用し牛舎を新築（現在牛舎）する
〃 51年	酪農専業	52 頭	25ha	サイロを建設し、当年より酪農専業経営となる
〃 52年	酪農専業	52 頭	25ha	長男誕生、住宅を新築する
〃 53年	酪農専業	52 頭	25ha	育成舎を建設
〃 55年	酪農専業	52 頭	25ha	デントコーン作業装備（ハーベスター、プランタ、テッピングワゴン）をそろえる
〃 56年	酪農専業	52 頭	30ha	土地 5ha 購入しデントコーン作付けを拡大する
〃 57年	酪農専業	52 頭	30ha	デントコーン主体とした給与体系となる
〃 61年	酪農専業	52 頭	32ha	国営事業により草地造成を実施
平成 4 年	酪農専業	64 頭	32ha	育成・乾乳舎新築により、育成管理作業の効率化が図られる
〃 7 年	酪農専業	64 頭	32ha	酪農体験学習の受入れ開始
〃 10年	酪農専業	64 頭	42ha	土地 10ha 購入
〃 11年	酪農専業	64 頭	42ha	長男が米国実習をへて後継者として就農、シラカバ林にログハウス建設
〃 13年	酪農専業	64 頭	42ha	酪農教育ファームに認証される
〃 14年	酪農専業	64 頭	55ha	道産間伐材を利用し木製パドックを整備
〃 15年	酪農専業	64 頭	55ha	土地 13ha 購入
〃 16年	酪農専業	64 頭	55ha	道産間伐材を利用し哺育・育成舎建設、屋根付たい肥舎建設
〃 19年	酪農専業	64 頭	55ha	牛群審査により道内最高点（85.9 点）を獲得する
〃 20年	酪農専業	64 頭	55ha	牛群改良の成果として当年まで 13 頭のエクセレントを獲得する 酪農教育ファームモデル牧場に認定される
〃 21年	酪農専業	64 頭	55ha	太陽光発電（ソーラーパネル設置）

2) 過去 5 年間の生産活動の推移

	平成 16 年	平成 17 年	平成 18 年	平成 19 年	平成 20 年
畜産部門労働力実員数（人）	3	3	3	3	3
飼養頭数（頭）	63	64	64	64	64
販売・出荷量等（t）	513	549	493	519	493
畜産部門の総売上高（円）	45,437,000	50,019,000	46,641,000	46,016,000	46,198,790
主産物の売上高（円）	37,683,000	39,574,000	35,150,000	36,767,000	38,463,860

4 特色ある経営・生産活動の内容

久保牧場は、小高い丘に位置し佐呂間湖や遠くオホーツク海を望む地区に位置しており、このことから別名レークランドファームと名づけている。また国道沿いにあり往来者の目につきやすく、農場の開放には恵まれたロケーションにある。道沿いにある大型の緑色の D 型倉庫を利用して酪農 PR の壮大な絵を描き道行く人々の注目を集めている。

経営規模は、いわゆる家族経営の範囲内にとどめることをモットーにしており、無理・無駄のない内容充実型の経営である。牛乳販売以外にも長年の牛作りによる成果として個体販売を有利に行い安定した収入を確保している。

飼養管理面でも町内トップクラスの農場であり、常に新しい技術を取り入れ日々改善を図っている。数多くの役職を務める中、地域に及ぼす影響力、貢献度も高い農場である。

早くから「酪農教育ファーム」の認証を受け、小中学生の体験学習を受入れるなどの活動を通じ、広く酪農を PR してきている。

[経営の特徴]

1) 収益性の高い中規模家族経営のモデル

今日、家族経営にあっても多頭飼養を目指す経営が多い中であって、家族労働で無理のない経産牛約 60 頭程度の中規模経営で、2 世代が十分に生活できる高所得を確保している。

入植してから今日まで、特には昭和 31 年の酪農への転換以来、飼養規模の拡大や施設投資等において、蓄積した自己資金での投資を基本としてきた。従って、負債の少ない自己資本比率の高い経営を持続してきている。このことは、酪農科学にもとづき実践することにより、地域の酪農家にとって到達可能なことを示し地域のモデルとなっている。

自然条件が決して良好でない中であって、まさに、土づくり、草づくり、牛作りが一体となった証である。この経営を一言で評するなら無駄のない合理性のある経営ということになる。そして、次に掲げる成果を生み、また次の生産技術を背景として成立している。

2) 施設・機械の保守管理

牛も施設も機械も固定資産は大切に扱い、できるだけ長く使うことをモットーにし、新規投資を抑えることで負債が低く自己資本を高めることで安定した経営を持続している。

牛舎施設は昭和 31 年に建てた搾乳牛舎を 5 回にわたり増改築し、現在の経産牛 62 頭飼養できるまでに規模拡大を図ってきた。同様に昭和 40 年に建てた格納庫も使いやすく改築し活用している。

機械については、昭和 33 年のトラクターが現役で活躍しているなど所有する機械は法定耐用年数の 2 倍以上の年数を使用する機械が多い。

これらの施設・機械については、無理をかけない使用を心がけ、点検等保守管理を徹底し、耐用年数を延ばすことにより投資額の低減を図ってきた。

日ごろより点検管理日を決め、特に毎日使用するバークリーナーは月 2 回のグリスアップを実施。作業機械について作業期間は使用後に洗車し、グリスアップするとともに月 1 回はオイルと水のチェックを実施している。

また、搾乳牛舎は年 2 回の石灰塗布、ガラス磨きを実施し、明るく清潔が保たれ人と牛に働きやすい環境を提供している。石灰塗布は隣近所の農家にも普及している。

3) 飼養管理

飼養管理については、搾乳舎を中心に哺育舎・育成舎（乾乳含む）が一体的につながっており、全体の飼養管理に目が行き届き、牛の移動、発情管理、飼料給与等の作業動線が効率的に作業できるよう配置されている。

(1) 哺育管理の特徴

哺育管理は主に奥さん（美恵子氏）が担当し、下痢をさせない管理を心がけている。

哺育舎では 4 ヶ月齢まで飼養され、以下の工夫・取り組みを行っている。

- ① 獣医師の指導を素直に受け入れ衛生管理の徹底を図り、ベットのすのこは月 1 回洗浄・消毒を実施し常に清潔を保っている。
- ② 全頭分娩に立会い、事故防止と初乳の確実給与を実施している。
- ③ 哺育育成舎のはりや柵は道産カラマツ材を使用している。木材を使用する一番の理由は木が呼吸することで湿度調整がなされる点である。また、金属の柵のように腐食がなく、天然のぬくもりを感じる点であり、間伐材を利用することで低コストである。
- ④ ③と併せて結露防止を考え、窓サッシはペア（二重）ガラスを使用している。
- ⑤ 飼槽は衛生面を考えステンレス製で簡単に反転できるよう工夫がしてあり、残飼は尿溝に落ちる仕組みになっている。
- ⑥ 畑作地帯の条件を活かし麦稈をふんだんに使用し乾燥に努めている。
- ⑦ 各房にはストールが設置され育成舎（フリーストール）へのならしとベットの汚れを防止している。

(2) 育成管理の特徴

4 ヶ月からはフリーストールの育成舎（一部乾乳舎含む）に移動する。

以下の取り組み工夫により当牧場の発育は良好であり、初産月齢（平成 18～20 年）は 24 ヶ月台を維持している。

- ① 育成舎は片流れで東面を高くとり、採光を十分取り入れる構造となっている。
- ② また育成舎にはユーティリティスペースがあり、飼料給与の利便、牛の移動、削蹄、治療の利用価値を高めている。
- ③ 最初に哺育舎より移動してきた育成房のベッドは古材を利用し、牛が最前方に行かないよう工夫されており、これと十分量の麦稈により床が常に乾燥した状態で清潔に保たれている。
- ④ 各房には出入り自由なパドック（7.2m×54m）が併設され運動と日光浴ができるようになっている。
- ⑤ 初妊牛は乾乳牛とともに木製柵（道産間伐材利用）の通路を通り、シラカバ林に囲まれたパドックへ行けるようになっており、牛の散策スペースを確保することで、牛のストレスをためないように心がけている。
また、パドックの最端に水飲み場を設けることで牛の運動を促すよう工夫している。
- ⑥ 市場出荷の際は削蹄、毛刈り、牛洗いを必ず実施し、付加価値を高めている。これにより市場販売を有利に進めている。

(3) 牛づくりと乳質管理

乳牛については昭和 50 年に地域の酪農家と「芭露ホルスタイン改良同志会」を設立し、中心となり乳牛の改良に精力的に取り組んできた。その成果として現在まで 13 頭のエクセレント牛を作出し、平成 19 年には年間乳量 2 万 kg のスーパーカウが誕生するなど、体型・能力の両面において改良がなされてきた。

特に連産性を高めるため肢蹄と乳器に重点を置き改良を進めてきたことで、個体乳量は過去 10 年間 9000～1 万 kg（乳検成績）、平均産次は 3 産以上を維持している。

生涯乳量を追及することで、牛に無理をかけない 9000kg 前後を設定している。

固定資産である牛を長持ちさせることで、生産コスト低減に結びついている。特に固定資産処分損益（平成 20 実績：15 万 6000 円）に大きく影響している。

淘汰更新（平成 20 実績経産牛淘汰率：14.4%）が低く抑えられたことにより、育成牛の個体販売比率が高く経営に大きく寄与している。

特徴的な取り組みは以下の点である。

- ① 牛舎内の衛生面については前述したが、石灰塗布、窓磨きにより牛舎内は明るく清潔に保たれている。
- ② 牛体（特に乳房）、牛床の清潔度を常に保っている。
ア）牛の尻尾洗いは 20 分かけて毎日欠かさず行っている。
また多くの訪問者があり消費者へのイメージを大切にしている。
イ）麦稈をふんだんに使用することで牛床の乾燥が促進され、牛の快適性を高めている。

- ③ プレディッピングの導入や過搾乳の防止を実践することで、町内でもトップクラスの乳質を維持している。

平成 20 年の乳検年間検定成績

項 目	単位	値
経産牛 1 頭当たり乳量	Kg	9, 169
脂肪率	%	4. 13
無脂固形分率	%	8. 60
乳蛋白質率	%	3. 15
初回授精開始日数	日	82
平均授精回数	回	2. 3
分娩間隔	日	411
初産分娩月齢	月 齢	24
平均リニアスコア	—	1. 9
リニアスコア 5 以上	%	5
平均体細胞数	万	9

- ④ ウォーターカップの管は太くすることで十分な水量を確保している。
- ⑤ 搾乳牛舎両サイドの壁に牛がぶつかり腰角を痛めないように学校の使い古しのマットを再利用している。
- ⑥ 飼槽の形状に合わせたエサ寄せ道具を工夫し、飼槽を清潔に保ち寄せ集められた残飼は通路清掃時のふん尿の吸収材として利用され無駄にしない。

4) 土地改良と自給飼料生産

農用地等保有状況

耕 地			耕 地 外	計
飼料畑	採草地	放牧地		
20. 7ha	30. 4ha		3. 2ha	54. 3ha (4. 2ha)

(1) 土地改良

当地の土壤条件は重粘土で表土が浅いことから一般作物の栽培には適していなかった地域である。現経営主の父である初代の茂さんが、未墾地を開拓し経営を営み、土づくりに励んできた。重粘土の排水不良を改善するためサブソイラーを使った土壌物理性の改善を継続的に実施するとともに、地域の特産品であるホタテの貝殻を使った「貝殻暗渠^{あんきよ}」を長年にわたり施工し排水性の改善を図っている。土壌改良を地道に重ねた結果、飼料作物の生産性は地域平均を上回る水準に達している。

(2) 自給飼料生産

- ① 飼料作付面積の約 40%に飼料用トウモロコシを作付し、飼料自給率を高めている。
- ② 牧草は、1・2・3 番とも低水分ラップサイレージもしくは乾草に調整している。
- ③ 飼料用トウモロコシの播種作業はすべて自家作業で行うが、収穫作業は地域のコントラクターに委託し短期間で収穫している。
- ④ 農地を有効利用する手段として、飼料用トウモロコシ収穫後に耕起・整地を行い、気温が低くなった初冬に牧草の種子を播くフロストシーディング工法を実践。
- ⑤ 年によっては、早めに 1 番草を収穫した後に飼料用とうもろこしを播種 (75 日品種) する方法で自給率の向上を図っている。

久保牧場自給率の推移

	平成 18 年	平成 19 年	平成 20 年
飼料自給率 (%)	63.1	63.6	59.1

※ 酪農畜産協会経営診断より抜粋

飼料給与においては自給飼料（コーンサイレージ、ラップサイレージ、乾草）を主体とした給与体系を確立し、濃厚飼料に依存しないスタイルを継続してきたことで、乳牛の事故や病気の低減を図ってきた。

5) 「酪農教育ファーム」としての取り組み

久保牧場における家畜とのふれあい体験交流の取り組みは、酪農教育ファームの認証制度（平成 12 年）が発足する以前の平成 7 年から行っており、このきっかけとなったのが、小学校教諭の娘さんからの提案だった。久保牧場の理念である「牛にやさしく生産する」ということを身を持って知っている娘さんが、子どもの成長過程で生き物に触れる機会が必要との思いから酪農体験をさせたいという熱意を汲んでの農場の開放でもあった。

最初は躊躇^{ちゅうちよ}したというが、以降毎年町内外から延べ 100 名の小中学生を受入れてきた。その後、宿泊体験のためのログハウスを施設の林内に建設した。

久保牧場では、体験メニューとして以下の 3 分野の内容が用意されている。

- ① その一つは久保さん自身による酪農家の仕事や牛の体の仕組みを学ぶことである。
- ② 二つ目は実際の搾乳・エサやり・牛舎掃除などの作業である。
- ③ 三つ目は乳製品づくりの体験であり、奥さんの（美恵子氏）によるヨーグルトやバターづくり体験である。

久保さんは「牧場での体験をつうじて酪農に興味を持ってもらうことで、酪農のすばらしさを伝えたい。しかし、それ以上に自分が子ども達から教えられたり、元気をもたらすことが多い。そして子どもたちと触れあうことが何よりも楽しい。だからやめられない」と語る。

6) ゆとり創出

久保牧場には「ほっとできる場所」がいくつかある。

それは、シラカバ林や日本庭園であり、菜園であったりする。元々木が好きで開拓当時のシラカバ林をととても大切にしている。現在、ここは牛の寛ぎスペースとなっている。

日本庭園は久保さん自身の趣味によるところが大きい、「ほっとできる場所」づくりをと構想しつくり上げてきた。久保さんは仕事の合間によくこの庭に来て考えごとをすることが多い。

また、菜園には馬鈴薯、マメ類、スイートコーンなどの自家用野菜が育ち、ハウスではブドウや桃などの果菜類が栽培されている。菜園は久保家の女性方が担当している。

20～21 年にソーラーパネルを設置し、太陽光発電を行い、牛舎に一部利用するなど環境に優しい農業を実践している。

5 地域農業や地域社会との協調、貢献

1) 多くの消費者に酪農を理解してもらい、より身近に感じてもらうために、平成 13 年に中央酪農会議の「酪農教育ファーム」の認証を受け、体験学習などを積極的に受入れている。

2) 平成 20 年「酪農教育ファームモデル牧場」に認定され、既に体験牧場を運営している酪農家はもちろん、新たに体験牧場を始めようとする酪農家へのアドバイスも行っている。

3) 近隣の小中学生の「総合的学習」や府県の修学旅行での酪農体験を積極的に受け入れ、年間約 250 名の子供達が搾乳やエサやり、バター・ヨーグルトなどの乳製品加工を体験する機会を設けている。

4) 平成 11 年には施設内にログハウスを整備し、遠方から訪れる観光客の宿泊場所として提供すると共に、これらの人たちとの交流をとおして湧別町や農業の PR を図っている。

5) また、牧場が往来の多い国道に面していることから、観光情報紙や看板を見て訪問してくる飛び込みの観光客も多いが、時間の許す限り対応し、広く酪農を PR している。

これらの取り組みは、網走支庁管内の中でも先駆的な事例として近隣町村に大きな影響を与えてきた。

6) 平成元年より町のスケートリンクづくりは毎年（12 月～2 月）欠かさず実施し、町内の子どもたちにスケートを通じた健康づくりの推進と保護者達の交流の場を提供している。

7) 遠湧地区指導農業士会・指導農業士会の設立に尽力し、設立時から現在まで当会の会長を務め、農業の担い手育成・確保に向けた活動の中心として活躍している。

8) 経営主の主な履歴

① 湧別町議会議員（平成 15～）

② 湧別町農業委員（平成 20～）

- ③ 湧別町農協（平成 14～20）
 - ④ 網走支庁指導農業士会副会長（平成 12～）
 - ⑤ 遠湧地区指導農業士会会長（平成 13～）
 - ⑥ 湧別町ヘルパー組合副組合長（平成 17～）
 - ⑦ 湧別町体育協会副会長（平成 19～）
 - ⑧ 湧別町スケート協会会長（平成 14～）
 - ⑨ 消防団（昭和 46～）37 年間継続（現在 副分団長）
- 9) 経営主妻（美恵子氏）
- ① 農協女性部副部長（平成 19～21）
 - ② 湧別町国際交流推進委員（平成 10～）
 - ③ 「楽酪楽食会」代表として地域の酪農女性を中心としチーズや乳製品作りを行っている。
後継者（拓也氏）
 - ④ 4 Hクラブ会長（平成 15～）
 - ⑤ 農協青年部長（平成 21～）

6 今後の目指す方向性と課題

- 1) 規模拡大は考えず適正規模の中、経営内容を重視し無理・無駄のない家族経営を引き継いでいきたい。
- 2) 初代父の背中をみて自身が学んできたように開拓者精神を子孫にも引き継いでいきたい。
- 3) 土壌的には重粘土で表土が浅いほ場が多く、作物栽培では不利な土壌条件にあり、「表土を 1cm つくるのに 100 年かかる」といわれるように、土づくりは永遠の課題と考え、開拓当初から現在まで継続してきた暗渠、明渠などの排水性の改善や有機物投入による土壌改良を今後も継続していきたい。
- 4) 牛の改良はゴールなき戦いであり、今後も長命・連産性を重視した牛づくりを継続していきたい。
- 5) 今後とも牧場での体験を通じて酪農に興味を持ってもらうことで、酪農のすばらしさを伝えたい。

【写真】



久保牧場のシンボルマーク(D型ハウス)



木にこだわった哺育舎



昭和 31 年から大切に使われてきた搾乳牛舎



牛群改良の成果エクセレント牛



牧場体験酪農家の仕事の説明



手作りしたバターを試食



宿泊体験用のログハウス



家族写真